

韓国語における（間）主観化研究の新たな視点 —韓国語学と言語学の融合の必要性—

新井保裕
東京大学

1. はじめに

（間）主観化という概念が1990年代後半に言語学分野で提起されて以来、様々な言語を対象にした（間）主観化研究が発表されてきた。¹⁾特に近年、歴史語用論研究の発達により、（間）主観化はこれまで以上に注目を集めている。²⁾しかし韓国語に焦点を当ててみると、その（間）主観化研究は英語だけでなく、日本語のそれと比べてみても多くない。韓国語を扱ったものも、韓国語の（間）主観化研究を志向しているものはさらに限られ、大半が、日本語のある言語現象を、言語類型論的に類似している韓国語のそれと対照することにより、日本語の方が（間）主観化が進行していると結論付ける「手段」に留まっている。しかしこれは（間）主観化が見られる言語現象が少ないことを表すわけでは決してない。これまで韓国語学で（間）主観化という術語が用いられなかっただけで、先行研究で（間）主観化が実質的に示されている韓国語の言語現象も少なくない。³⁾また日本語と比較してみても、韓国語の方が（間）主観化が進行していると考えられる言語現象の例も指摘できる。

そこで本稿では、（間）主観化とはどのようなものであるかを概観した上で、韓国語学の先行研究で実質的に示された、韓国語における（間）主観化の言語現象例を提示する。さらに既存研究でほとんど指摘されてこなかった、日本語よりも韓国語の方が（間）主観化が進行している例として、韓国語‘만’と日本語「だけ」の用法変化を挙げる。これらの議論を通じて、これまでの韓国語における（間）主観化研究で見過ごされてきた視点を提供し、韓国語学と言語学の融合の必要性を訴える。⁴⁾

2. （間）主観化

まず本節では（間）主観化の定義を確認し、先行研究を概観する。

2. 1. （間）主観化の定義

Traugott(1995)は（間）主観化を以下のように説明している。

(1) （間）主観化 ((Inter)subjectification; Traugott1995)

a. 「内容」を表す意味が話し手の主観的な信念状態・態度を表すように

なる。(主観化)

- b. 話し手の主観的な信念状態・態度を表す意味が聞き手志向的な意味を表すようになる。(間主観化)

(Traugott(1995: 31), 澤田編(2011: xxxii) 5)

(1)が(間)主観化の説明であり, ある言語表現が次第に主観性(subjectivity), そして間主観性(intersubjectivity)のある意味を表すように用法が変化することを言う。頻繁に引用される(間)主観化の具体例として英語の繰り上げ構文‘be going to’や法助動詞‘must’, ‘may’の例が挙げられる。例えば繰り上げ構文‘be going to’の場合, 元は移動動詞(～に行く)であったが(=(2a)), 主語の意図(～するつもりだ)を表す構文となり(=(2b)), 最後は繰り上げ構文(～しそうだ)となった(=(2c))(澤田編 2011)。繰り上げ構文は, 話し手の判断を表すという点で主観的とされるという。6)

- (2) a. I am going to visit the prisoner. Fare you well. (Exit)

[1604 Shakespeare, *Measure for Measure*]

- b. I ha' forgot what I was going to say to you.

[1663 Cowley, *Cutter of Coleman Street*]

- c. I am afraid there is going to be such a calm among us, that we must be forced to invent some mock Quarrels

[1725 Odingsells, *The Bath Unmask'd*]

(以上, 澤田編 2011: xxxiii-xxxiv)

またこの(間)主観化は英語だけでなく日本語や中国語, ドイツ語など通言語的に見られる現象であることが, Traugott&Dasher(2001)やNarrog(2012)等の研究で指摘されている。7)

なお Langacker の認知文法でも subjectivity, subjectification という術語が用いられ, しばし混同される向きがあるが, Traugott の subjectivity, subjectification と Langacker のそれは異なるものであり, 区別を要する。その違いについて Langacker(2006)では以下のように述べられる。

- (3) Traugott の場合, 主観性(subjectivity)と主観化(subjectification)という用語は, ある状況が存在する領域(domain)と関係している(概念内容(conceptual content)の問題)。それゆえ, ある表現が次第に主観的(subjectivity)になっていくという言い方には意味がある。しかしながら, 私の場合, 主体性(subjectivity)と主体化(subjectification)という用語は, 視点(vantage point)と関係している(捉え方(construal)の問題)。私の定義の下では, ある表現やその意味がどの程度主観的

(subjective)であるということは意味をなさない。すなわち、ある特定の要素がその場面全体でどう捉えられているのかについて云々することこそが重要なのである。

(Langacker2006: 17-18, 澤田編 2011: xxxii)

日本語では Traugott の subjectivity を「主観性」、Langacker のそれを「主体性」と訳し分けることが多いが、そうでない研究も散見される。また韓国語では共に‘주관성 [主観性]’と翻訳され、混同されることが多い。⁸⁾

本稿は用法変化を分析の対象とし、韓国語における特定の言語表現の用法変化にも(間)主観化が見られ、日本語よりも(間)主観化が進行している例もあることを示すため、Traugott の「(間)主観化」の定義に従う。

2. 2. 韓国語・日韓対照を扱った(間)主観化研究

本項では韓国語を扱った(間)主観化研究の先行研究を見ていく。しかし1節でも述べたように、韓国語の(間)主観化研究は多くなく、さらにその中でも日韓対照を通じて、日本語の(間)主観化の進行を表す「手段」に留まっているものが少なくない。(間)主観化に注目を集めさせた歴史語用論研究において著名な学術誌“Journal of Historical Pragmatics”を例にとっても、韓国語の(間)主観化を中心的に扱った論考は2015年3月末現在で Park(2010)しか見られない。⁹⁾歴史変化の特集号が組まれた日本語とは対照的である。¹⁰⁾他の学術誌まで範囲を広げ、韓国語の(間)主観化に触れている先行研究を見ると、次のような論考が散見される。¹¹⁾

《韓国語・日韓対照を扱った(間)主観化研究一例》

金廷珉(2010)「文法化理論を応用した日韓語の文末形式に関する対照研究—「のだ」と「것이다」の意味変化の対比を中心に—」『日本學報』84

金廷珉(2011)「「みたいな」と「다는」に関する日韓対照研究」『日本學報』89

奈良林愛(2012)「‘-게 き엿-’とモダリティ」『朝鮮學報』224

나라바야시아이(2007)「양태를 나타내는 ‘-게 き엿-’의 의미변화에 대해서」『국어학』49

Akatsuka, Noriko. and Sung-Ock. Sohn. (1994) “Negative conditionality: The case of Japanese *-tewa* and Korean *-taka*” *Japanese/Korean Linguistics* 4

Horie, Kaoru. and Yuko. Sassa. (2000) “From Place to Space to Discourse: A Contrastive Linguistic Analysis of Japanese *tokoro* and Korean *tey*” *Japanese/Korean Linguistics* 8

Kim, Joungmin. and Kaoru. Horie. (2008) “Intersubjectification and Textual Functions of Japanese *Noda* and Korean *Kes-ita*” *Japanese/Korean Linguistics*

- Kim, Minju. (2011) “The Historical Development of the Korean Suffix *-key*”, *Japanese/Korean Linguistics* 19
- Park, Chongwon. (2010) “(Inter)subjectification and Korean honorifics” *Journal of Historical Pragmatics* 11
- Park, Chongwon. and Sook-Kyung. Lee. (2004) “A Diachronic Account of the Speaker-Listener Honorific Marker *-sup* in Korean” *Japanese/Korean Linguistics* 12
- Rhee, Seongha. (2011) “Context-induced reinterpretation and (inter)subjectification: the case of grammaticalization of sentence-final particles” *Language Sciences* 34
- Park, Mee-Jeong. and Sung-Ock. Sohn. (2002) “Discourse, Grammaticalization, & Intonation: An Analysis of *-ketun* in Korean” *Japanese/Korean Linguistics* 10
- Sohn, Sung-Ock. (2008) “On the Emergence of Intersubjectivity: An Analysis of the Sentence-final *nikka* in Korean” *Japanese/Korean Linguistics* 16
- Strauss, Susan. and Sung-Ock. Sohn. (1998) “Grammaticalization, Aspect, and Emotion: The Case of Japanese *-te shimau* and Korean *-a/e pelita*” *Japanese/Korean Linguistics* 8

またこれらの研究を、韓国語を扱ったものと日韓対照を扱ったものに分類し、著者（発表年）と対象表現、概要をまとめると次の表のようになる。¹²⁾

表 1 韓国語・日韓対照を扱った（間）主観化研究

韓国語を扱ったもの		
著者（発表年）	対象表現	要旨
Park&Sohn(2002)	‘-거든’	接続表現から文末表現になるのと並行的に、【条件】から【譲歩】、【正当化】へと用法変化
Park&Lee(2004), Park(2010)	‘-습-’	敬意の方向が主体→客体、話し手→客体から話し手→聞き手へと変化（客体敬語から聞き手敬語）
Sohn(2008), Rhee(2011)	‘-니까’	接続表現から文末表現になるのと並行的に、【因果】から話し手の態度、談話的なものを表すように用法変化
Kim(2011)	‘-게’	【目的】から【使役】の ‘-게 하-’, 認識的モダリティの ‘-겠-’へと用法変化
나라바야시(2007), 奈良林(2012)	‘-겠-’	‘-게 き겠-’から-겠-への変化の中で拘束的モダリティから認識モダリティの意味が強化
日韓対照を扱ったもの		

著者（発表年）	対象表現	要旨
Akatsuka&Sohn(1994)	‘-다가’	「ては」が命題の意味から、主観的、間主観的意味を帯びるのに対して、‘-다가’は【中断】から否定的な【条件】を表す
Strauss&Sohn(1998)	‘버리다’	「しまう」同様に物理的な意味からアスペクトの意味へと変化するが、「しまう」は【強調】や【感情】、社会方言の機能も備える
Horie&Sassa(2000)	‘-데’	「ところ」は、連体形が前接、助動詞「だ」が後接してアスペクトの意味を備えるのに対して、‘-데’に連体形が前接した‘-는데’は主観的用法を備える
Kim&Horie(2008), 金廷珉(2010)	‘것이다’	‘것이다’と「のだ」は共に（間）主観化を志向するが、‘것이다’は意味変化に制約
金廷珉(2011)	‘-다는’	「みたいな」な話し手の「考え、感情」の他に聞き手の「考え、感情」や「発話」も引用するが、韓国語‘-다는’の機能は前者に限定

まず著者に注目すると、奈良林の一連の研究以外は、欧米言語学の理論を専攻する英語研究者や類型論研究者、日本語研究者の一般言語学的研究であり、韓国の国語学、韓国語学を専攻する韓国語研究者の研究が非常に限られていることがわかる。また日韓対照研究に目を向け、その概要を見ると、日本語の言語表現よりも韓国語のそれの方が（間）主観化が進行していることを指摘したのは、「ところ」と‘-데’を対照した Horie&Sassa(2000)のみである。

しかしこの表が、韓国語には（間）主観化を見せる言語現象が少ないことを表すわけでは、当然ない。表中で韓国語学の観点からの研究が少ないことが指摘されたが、その韓国語学の分野で明らかにされてきた用法変化の中には、（間）主観化という術語が用いられていないだけで、実質的には（間）主観化を表しているものが少なくない。そしてそうした研究の中には、日本語よりも韓国語の方が（間）主観化が進行していると考えられる言語現象の例も存在する。次節以降では、そうした言語現象の具体的な姿を見ていき、（間）主観化研究において韓国語学、そして言語学が見過ごしてきた点を指摘する。そして両者の融合の必要性を考えていく。

3.（間）主観化と捉えられる韓国語の言語現象

前節では（間）主観化という通言語的な概念を確認した。そして韓国語における（間）主観化を扱った先行研究を概観したが、主に言語学の先行研究

で(間)主観化が明示されている言語現象の他にも, 韓国語学の分野で実質的に(間)主観化が示されている言語現象例も多く存在する. 本節ではそうした例のうち, ‘-(으)ㄴ래’, ‘-어야지’, ‘-더-’を取り上げる. ¹³⁾

3. 1. ‘-(으)ㄴ래’

박재연(2006)によると, ‘-(으)ㄴ래’は‘-(으)려고 하-’の融合を経て形成された終結語尾で【意図】を表す. 伝統的なモダリティ区分では【意図】は拘束的モダリティ(deontic modality)に属するが, 박재연(2006)でも‘-(으)ㄴ래’が持つ【意図】を拘束的モダリティの一種と捉え, 再帰的条件を付加するものとして「話し手自身を動作主とする事態を成立させるという意志を表明すること」を表現すると述べた. ¹⁴⁾(4a)では平叙文に‘-(으)ㄴ래’が用いられ, 話し手がご飯を食べないという事態を成立させようとする意図を持つことを表現する一方で, 疑問文に‘-(으)ㄴ래’が用いられる(4b)では聞き手が何になる意図を持っているかを尋ねる文章である.

- (4) a. 나는 여기서 밥 안 먹을래.
b. 너 커서 뭐가 될래?

(박재연 2006: 243)

また‘-(으)ㄴ래’が表現する【意図】は話し手/聞き手自らに付加する条件であるため, ‘-(으)ㄴ래’は平叙文では一人称主語のみを, 疑問文では二人称主語のみを取ることができる.

- (5) a. 나는 일주일 정도 여행을 할래.
b. *너는 지금 스스로 죽을래.
c. *철수는 유학을 갈래.
d. {내가, 네가, 철수가} 지금 죽으려고 해.
(6) a. *내가 지금 나만 잘 될래?
b. 너 여행 안 갈래?
c. *철수는 유학 갈래? (‘철수’が三人称である場合)
d. {내가, 네가, 철수가} 지금 죽으려고 해?

(以上, 박재연 2006: 244)

(5a-c)は‘-(으)ㄴ래’が平叙文で一人称主語だけを取ることができるという事実を見せ, (6a-c)は‘-(으)ㄴ래’が疑問文で二人称主語だけを取ることができる事実を示している. これは(5d), (6d)で‘-(으)려고 하-’が主語の人称に制約を持たないという事実とは対照的である (박재연 2006).

このように박재연(2006)では‘-(으)ㄴ래’とその遡及形である‘-(으)려고

하-'には上記人称制約差があることが述べられている。それでは'-(으)려고 하-'にはなかった人称制約が、なぜ融合形である'-(으)ㄹ래'には生じたのだろうか。'-(으)려고 하-'が主語の【意図】を表すのに対して、人称制約のある'-(으)ㄹ래'は話し手(疑問文の場合は聞き手)の【意図】を表している。文中で【意図】を表す主体が主語から話し手にかわっている、つまり、主語志向(subject-oriented)から話し手志向(speaker-oriented)になっているが、これは「話し手の主観的な信念状態・態度を表すようになる」という主観化の例に他ならない。박재연(2006)では直接的な言明こそされていないものの、人称制約を伴った'-(으)려고 하-'から'-(으)ㄹ래'への変化は、韓国語における主観化の一例である。

3. 2. '-어야지'

続いて'-어야지'について見ていく。박재연(2006)によると、'-어야지'は構成上【義務】を表す迂言形式'-어야 하-'構成と終結語尾'-지'が統合して'하-'が脱落した形式であるが、その意味が単純な'-어야 하-'と'-지'の足し算で説明されるのではなく、【決心】という新しいモダリティの意味を表す場合があるという。【決心】も拘束的モダリティに含まれ、再帰的条件を付加するものとして、「話し手が自身の行為を成立させようと話し手自身に約束する意味を表現するもの」である(박재연 2006)。

- (7) a. 저는 여기 더 있어야지요.
 a'. 저는 여기 더 있어야 하지요.
 b. 너도 지금 떠나야지?
 b'. 너도 지금 떠나야 하지?
 c. 너희들이 열심히 공부해서 몇몇한 사람이 되어 이런 일이 없이 사는 세상을 만들어야지.
 c'. 너희들이 열심히 공부해서 몇몇한 사람이 되어 이런 일이 없이 사는 세상을 만들어야 하지.

(박재연 2006: 256)

(7a-c)は'-어야 하-'が'-지'と取って縮約した例を提示したものであるが、これらの例文の意味は、(7a'-c')に提示した縮約が起こっていない例文の意味と違いはないという。つまりこのときの'-어야지'は形式上縮約が起こったが、依然として'-어야 하-'構成が持つ【義務】の意味を維持しており、主語に対する制約もない(박재연 2006)。

- (8) a. 내가 철수를 골탕먹여야지.
 a'. 내가 철수를 골탕먹여야 하지.

- b. 네가 철수를 골탕먹여야지.
- b'. 네가 철수를 골탕먹여야 하지.
- c. 영희가 철수를 골탕먹여야지.
- c'. 영희가 철수를 골탕먹여야 하지.

(박재연 2006: 256-257, 但し筆者が掲載構成を変更)

しかし박재연(2006)によると(8a)の‘-어야지’は‘-어야 하-’構成が持つ【義務】の意味を維持していると見るのが難しいという。話し手に철수를ひどい目にあわせなければならぬという義務が存在して、これを聞き手に報告するのではないためである。このときの‘-어야지’は話し手が話し手自らに課す約束である【決心】を表現する。そしてこの【決心】の‘-어야지’は、その意味論的属性からも推測できるように必ず一人称主語だけを取る(박재연 2006)。

先の‘-(으)래’とその遡及形である‘-(으)려고 하-’には人称制約の有無という違いが見られるのと同様に、‘-어야지’とその遡及形‘-어야 하지’にも人称制約の有無という違いが確認される。人称制約のない‘-어야 하지’が主語の【義務】を表すのに対して、人称制約のある‘-어야지’は話し手の【決心】を表す。このような主語志向から話し手志向のモダリティの変化もまた「話し手の主観的な信念状態・態度を表すようになる」主観化の一例と言える。박재연(2006)ではこうした主観化が実質的に記述されているものの、やはり言明されていない。

3. 3. ‘-더-’

最後に‘-더-’の意味用法を見る。박재연(2006)は‘-더-’を認識的モダリティ(epistemic modality)の一種と捉え、「過去の知覚によって新たに知ることになった事実を、その事実を聞き手は知らないと仮定して知らせる意味を持つ」と述べた。¹⁵⁾

- (9) a. 철수가 운동장에서 체조를 하더라.
- b. *세종대왕이 직접 한글을 만드시더라.
- (10) a. 그 사람 알고 보니 영 사람이 되었더라.
- b. *나는 옷을 입더라.
- (11) a. 영희가 곧 결혼하더라.
- b. *너도 이미 알겠지만 영희는 1년 전에 결혼했더라.

(以上, 박재연 2006: 156-162, 但し筆者が掲載構成を変更)

(9-11)はそれぞれ‘-더-’が「事実を知覚したこと」、「事実を新たに知ることになったこと」、「事実に対する聞き手の未知を仮定していること」を表し

ている例である。(9a)は, ‘철수’が体操をしている姿を話し手が直接目撃した後に成立する文章であるのに対して, (9b)は話し手が当代の人物でない限り, 世宗大王がハングルを作る姿を直接見ることができないため非文となる(박재연 2006).

(10a)の話し手は過去のある時点で, 文中の「その人」の人柄について新たな認識をしたことを表しているが, (10b)のように話し手自身のことを表す場合は, 特殊な状況(例えば, 自身もどの服を着て外出したか, しっかりと把握せぬまま, あとで気がつくような状況)を除いて, 新たに認識するというのは自然ではないため非文となる(박재연 2006). 박재연(2006)によると, ‘-더-’には非同主語制約, あるいは人称制約があり, 平叙文では一人称主語が用いられず, 疑問文では人称主語が用いられないが, この制約には, ‘-더-’が「事実を新たに知ること」を表すことが関連しているという.

(11)は「事実に対する聞き手の未知を仮定していること」を表す例であるが, (11a)が成立して(11b)が成立しないのは問題の情報を聞き手がすでに知っていることが(11b)では言明されているためである.

ここまで現代韓国語における‘-더-’の認識的モダリティとしての意味を概観してきたが, 中世韓国語では‘-더-’はアスペクト(aspect)・テンス(tense)を表していたことが多くの先行研究で指摘されている.¹⁶⁾その中でも고영근(2010)は‘-더-’を回想法とし, 時制は二種類の観点で説明できると述べた. 発話時を基準とすれば過去時制に解析され, 経験時を基準とすれば現在時制になる. 現代韓国語との違いはないという.

(12) 쁘데 몬 마즌 이리 다 윈 마티 드외더라

(뜻에 못 맞은 일이 다 윈같이 되었다)

[월인석보] (고영근 2010: 280)

しかし(12)は形態だけ‘-더-’が現れるだけであり, 意味上は話し手の直接的経験とは何の関係もない, 過去事実に対する単純な陳述であるという(고영근 2010). これは「知覚」を必要条件とする現代韓国語の‘-더-’とは明らかに異なる. 中世韓国語から現代韓国語への‘-더-’の通時的変化を見たとき, ‘-더-’はアスペクト・テンスを表すものから, 認識的モダリティを表すものになっている. こうしたモーダルな意味の獲得は「話し手の主観的な信念状態・態度を表すようになる」ことであり, 他ならぬ主観化の例である.

中世語から現代語の変遷の中で主観化の経路を辿った‘-더-’であるが, 現代韓国語ではさらに別の用いられ方が成されている.

(13) A: 너 여렸을 때 참 귀여웠어.

B: 어, 내 옛날 사진 보니까 진짜 귀엽더라.

金珍娥(2013)によると、上記(13)の話し手 B の‘귀엽더라’は、聞き手 A が知らない過去の事実を A に知らせる発話ではないという。聞き手にとって未知の事実ではない点で、박재연(2006)が指摘した‘-더-’の意味用法とはすでに異なりが見られる。ここではむしろ、聞き手 A から告げられた事実に対して、「(知らなかったけど、小さい時は) そうだったね」といった意味を含ませながら、〈写真を見た体験時点〉の後に、体験時点の前の過去のことがらを〈客体化〉し、‘귀엽더라’と言っている(金珍娥 2013)。金珍娥(2013)はこの〈体験客体化〉のムード(mood)が談話の中では〈緩衝表現〉として作用していると述べた。〈緩衝表現〉を用いて述べることで聞き手が感じる負担を軽減することになるが、こうした聞き手志向の意味の獲得は間主観化にまさに当てはまる。

‘-더-’は中世韓国語でアスペクト・テンスを表していたが、次第に現代韓国語で認識的な意味を表すようになり、通時的な主観化が見られるようになった。さらに主観化が進行するにつれて、「話し手の主観的な信念状態・態度を表す意味が聞き手志向的な意味を表すようになる」間主観化の傾向も見える。‘-더-’は先行研究でその指摘こそされていないものの、韓国語における(間)主観化をよく表した言語現象であると言えよう。¹⁷⁾

本節では‘-(으)ㄹ래’, ‘-어야지’, ‘-더-’の意味用法とその変化を鳥瞰した。先行研究で体系的な指摘こそ成されていないものの、これら言語現象の意味用法変化は、通言語的に見られる(間)主観化の経路を辿っていることが確認される。(間)主観化という概念は韓国語学にも十分に適用できる、有用な概念であると言えるだろう。また言語学の(間)主観化研究にとっても韓国語は新たな研究対象としての可能性を秘めており、韓国語を深く分析してきた韓国語学の視点が求められることがわかる。¹⁸⁾

4. 日本語よりも(間)主観化の進行が考えられる韓国語の言語現象

前節では、既存研究で体系的な指摘が成されてこなかった韓国語における(間)主観化の例を概観した。韓国語における(間)主観化研究の問題点として2節で提起した先行研究の少なさは今後克服されるものと期待されるが、ここでもう一つの問題点について考える。それは現状の数少ない先行研究も、大半が、日本語のある言語現象を韓国語のそれと対照することにより、日本語の方が(間)主観化が進行していると結論付ける「手段」に留まっているという点である。しかしこれまで体系的指摘がされてこなかっただけで、(間)主観化という言語学の概念が韓国語学にも十分に適用できることが明らかになった今、その視野を広げて、「日本語のある言語現象は韓国語の該

当言語現象よりも（間）主観化が進んでいる」という先行研究の指摘も再検討しなければならない。

そこで本研究ではそうした指摘の反例として、韓国語‘만’と日本語「だけ」の用法変化を挙げる。両者の用法変化には（間）主観化という共通性が見られる一方で、その（間）主観化の経路には相違性があることを指摘する。そして（間）主観化の相違性の背景を①語彙、②統語構造、③表現構造という言語学的構造の要因から探る。¹⁹⁾類型論的に類似していると言われる韓国語と日本語でどうして（間）主観化に相違性が生じるのかを考察することで、通言語的に見られる（間）主観化と個別言語の言語学的構造の関係を明らかにする。そして（間）主観化研究に新たな視点を提供することを目的とする。

20)

4. 1. ‘만’と「だけ」の用法変化

新井(2014)では韓国語‘만’と日本語「だけ」における用法変化の日韓対照研究を行った。主に先行研究を手がかりにして、通時的、共時的の両観点から分析した結果、両形式の用法変化を下図のように明らかにした。

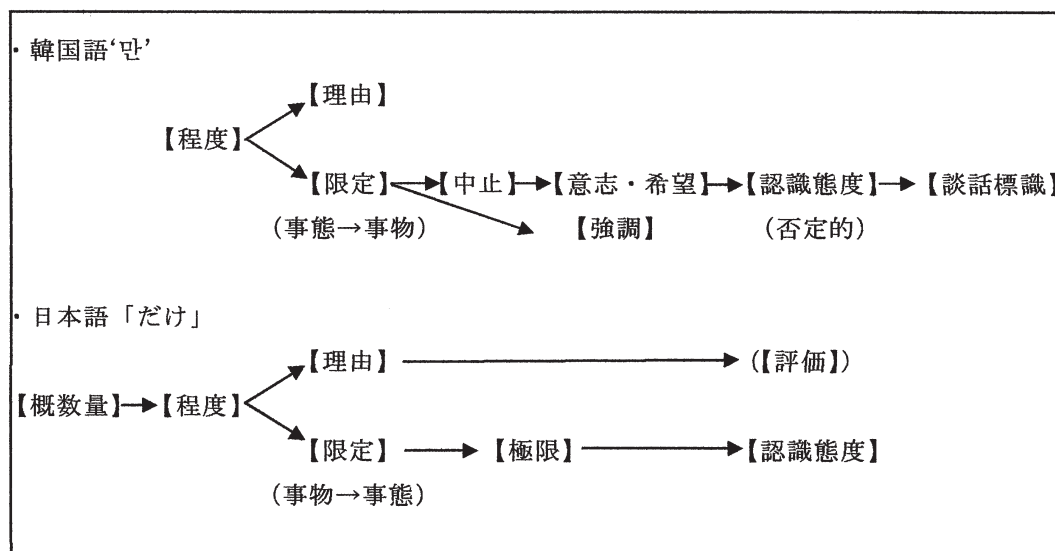


図1 韓国語‘만’と日本語「だけ」の用法変化（新井 2014: 95）

本節では、この新井(2014)の用法変化モデルを出発点に、適宜修正を加えながら、‘만’と「だけ」の用法変化を再考する。ただし新井(2014)では通時的、共時的両観点から鳥瞰したが、本稿では紙幅の都合上、主に現代語の例を中心に共時的観点から、その用法変化を概観する。²¹⁾

4. 1. 1. 韓国語‘만’の用法変化

韓国語の‘만’には次のように【程度】、【限定】の用法があり、通時的に【程

度】 (= (14)) から【限定】 (= (15)) へと用法が拡張したことが知られている。²²⁾

(14) 청군이 백군만 못하다. 【程度】

(15) 나는 너만 좋아해. 【限定】

(以上, 문명열 2009: 143)

また‘만’の他に【程度】を表す‘만하다’, ‘만큼’という形式が現代語には見られる (= (16-17)). ‘만큼’はそのスケール性を生かして, 前件と後件の比例関係を表し, 【理由】という用法を備える (= (18)).

(16) 그가 화를 낼 만도 하다. 【程度】

(17) 노력한 만큼 대가를 얻다. 【程度】

(18) 어른이 심하게 다그친 만큼 그의 행동도 달라져 있었다. 【理由】

[以上, 국립국어원 2015]

新井(2014)では【程度】用法として捉えていたが, 現代語の‘만’には【評価】用法が認められる。これも【理由】と同様に【程度】に見られる‘만’のスケール性を生かし, そのスケール性を評価するところから【評価】が生じているものと考えられる。²³⁾

(19) 일본은 한 번 가 볼 만하다. 【評価】

[本稿への査読コメント]

なお【限定】用法の‘만’は用言の未来冠形詞形が前接した例が中世語に見られる (= (20)). 通時的には前接要素が用言から名詞へと拡大しており, 韓国語の‘만’が限定する意味対象は, 事態から事物へと拡大している。

(20) 이 施主 | 오직 衆生이그에 一切 즐거븐 것 布施할 만
야도 【限定】

[釋譜詳節] (문명열 2009: 150, 고영근 2010: 74)

【限定】を表すようになった‘만’は二つの方向へ派生する。一方向では, 相反的強調・感嘆(洪思滿 1979)という【強調】用法を獲得する (= (21)).²⁴⁾またもう一方向では, ‘만’が指示冠形詞‘그’と結合した‘그만’が, 副詞として動詞に前接することで, 【中止】の用法を備えるようになった (= (22)).²⁵⁾さらに先行事態を【中止】して新しい事態を始めようとする【意志・希望】を表すようになる (= (23)).²⁶⁾さらに‘그만’は, 先行動作に続いて後行事態

が成し遂げられることを表すが、後行事態が主語の予期しなかった事態であったり (= (24)), 別の選択肢があったにもかかわらず行ってしまったことを後悔する事態であったりするという (= (25)), 話者の否定的な【認識態度】を表す。ただ新井(2014)では‘만’から派生した‘그만’は否定的な【認識態度】を表すのみであると述べたが, ‘그만’に繫辞‘이다’が接続した‘그만이다’は肯定的な【認識態度】を表す (= (26)).²⁷⁾そのため, 新井(2014)で提示した‘만’の用法変化モデルには修正を施し, ‘만’は後述の「だけ」と同様に話者の肯定的, 否定的【認識態度】を表せるとしなければならない。

(21) 話者 A : 어때? 빨리 달리지 않지?

話者 B : 아니. 빨리만 달린다. 【強調】

(洪思滿 1979: 34)

(22) 그만 먹어라. 【中止】

一次的 : 그 정도까지만 먹어라. 【限定】

二次的 : 그 이상은 먹지 말라. 【中止】

(23) 이제 그만 갑시다. (≒이제 그만하고 갑시다.) 【意志・希望】

(24) 오랜 병 끝에 그만 세상을 뜨고 말았다. 【認識態度】

(25) 4 개월 된 아이를 가운데 놓고 남편과 목소리를 높여 가며 싸우다

그만 방 안에 있던 물건들을 마구 집어 던졌습니다. 【認識態度】

(以上, 이기갑 2009: 46-49)

(26) 이 집 고기 맛이 그만이다. 【認識態度】

[新井(2014)への講評コメント]

標準語‘그만’に見られる用法, 用法変化は上の通りだが, 東南方言‘고마’では, 対等な意味関係にある前件と後件において, 後件に対する否定的な【認識態度】を表すばかりではなく (= (27)), 談話の進行を補助する【談話標識】として用いられている (= (28)). 新井(2014)では指示冠形詞‘이’に‘만’が接続した‘이만’が標準語で, ある事態を終える際の定型表現であることから談話進行を補助していると考え, 標準語にも‘만’の【談話標識】としての機能が認められると述べた (= (29)). しかし中世語の手紙文でも‘이만’が最後の挨拶に用いられる用例がある (= (30)).²⁸⁾今日の手紙で‘그럼 이만’のような終わりの挨拶を使う習慣の起源はこのように 16 世紀まで遡ることができ (이승희 2011), (29)の標準語の例を【認識態度】用法と捉えるのは難しい. 李賢熙(2015)でも(31)の‘그만’を【中止】用法と捉えていることから, (29)や(30)も【中止】用法と考えるべきであろう. ここでも新井(2014)の見解を修正し, 標準語の‘만’には【談話標識】の用法は認められないとしなければならない。

(27) 인자 부재, 인는 사람드른 우에 여르 기더빠리고. 쏘:까리마 다마:
해:목꼬 또 우리드른 머 쪼깨~이 꼬 빠수능거 마 마구 고만 이려가:
거마 다마아서 목꼬 그으도 쏙:가리 빼고 격까리 빼고
그람니도. 【認識態度】

(인제 부자, 있는 사람들은 위에 이것을 걷어 버리고. 속가루만
담아서 해 먹고. 또 우리들은 조금 그 빵는 것 마 마구 그만. 이래
가지고 그만 담아 와서 먹고. 그것도 속가루 빼고 겉가루 빼고
그립니다.)

(이기갑 2009: 54)

(28) 우리느 고만 이리 고만 시미르 영꼬 이리 늑꼬 나서느 고만
자숙드리 아:무겉또 하지마라캐. 【談話標識】

(우리는 그만 이렇게 그만 힘이 없고 이렇게 늑고 나서느 그만
자식들이 아무것도 하지 말라고 해.)

(이기갑 2009: 63)

(29) 설문조사가 성공적으로 끝나길 기대하겠습니다. 그럼 이만.
심리양! 【中止】

[윤영현 외 1995 『고려대학교 교양국어 작문자료』] 29)

(30) 맛바 이만 【中止】

[달성] (이승희 2011: 241)

(31) 이제 그만! (늑이제 그만하고 쉽시다.) 【中止】

(李賢熙 2014: 2)

ここまでの議論をまとめ、新井(2014)で提示した韓国語‘만’の用法変化モデルを修正すると次の図2のようになる。‘만’が表す【認識態度】は肯定的なもの、否定的なもの両者を表し得る。また標準語では【談話標識】用法は認められないが、前述の通り、東南方言ではそうした用例が見られるため、括弧付でモデルに組み込む。 30)

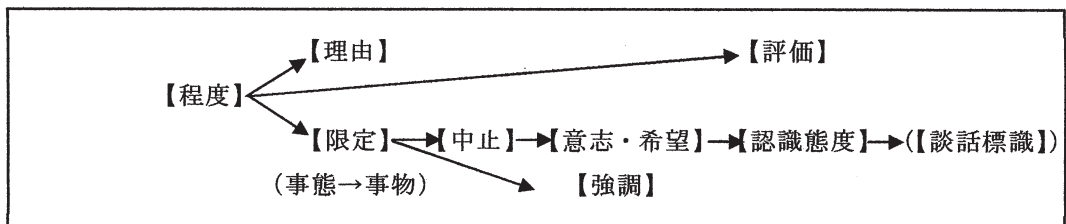


図2 韓国語‘만’の用法変化 (本稿)

4. 1. 2. 日本語「だけ」の用法変化

続いて日本語「だけ」の用法変化を概観する。「だけ」は「丈」に由来し(= (32)), 【概数量】 (= (33)), 【程度】 (= (34)), 【限定】 (= (35)) の順に

用法拡張したことで知られる。

(32) 年にもあはず、丈たかくかしこし。

[正法眼蔵随聞記] (宮地 2010: 425)

(33) 硬貨は…，片手で握れただけが賞金としてもらった。【概数量】

(沼田 2009: 93)

(34) 欲しいだけもって行っていいんですよ。【程度】

(35) 1章だけ読んだ。【限定】

(以上，日本語記述文法研究会編 2009: 46-53)

ただし【程度】からの用法変化は【限定】以外にもう一方向あり，「だけ」のスケール性を利用して【理由】用法が見られる(=(36))。これは‘만/만큼’にも見られた同様の用法拡張である。さらにその【理由】用法は語用論的条件や特立のとりたて助詞「は」と結びつくことで，【評価】の用法を備え得る(=(37-38))。

(36) 自分のしたことがわかっているだけに，つらかった。【理由】【評価】

(日本語記述文法研究会編 2008: 135)

(37) 5年間も留学してただけあって(≡だけのことはあって)，佐藤の英語力はたいしたものだ。【理由】【評価】

(38) 鈴木は持久力に優れている。さすが元陸上選手だけのことはある。【理由】【評価】

(以上，日本語記述文法研究会編 2009: 53，括弧内は筆者)

もう一方では，「だけ」の【限定】用法が優勢となり，とりたて助詞体系への参与が見られる。「だけ」の前接要素も名詞から用言に拡大し，その【限定】する意味対象も事物から事態へと拡大する(=(39))。この拡大方向は‘만’とは対照的である。さらに語源「丈」本来の意味である「長さ」が持つスケール性が生かされ，【極限】用法が生じる(=(40))。そしてそこから話者の【認識態度】を表わすようになるが，動詞の非過去形と接続する場合は肯定的な態度，それ以外と接続する場合は「不足感」のような否定的な態度が現れる(=(40-41))。

(39) 掃除した。洗濯もした。勉強もした。風呂にも入った。食事も済ませた。あとは寝るだけだ。【限定】

(40) 注意しただけだ。きつく叱ったなんてとんでもない。【極限】

(41) すべきことはみんなした。あとは結果を待つだけだ(≠あとは結果を待つしかない)。【認識態度】

(以上、近藤他 2012: 116-119, 括弧内は筆者)

- (42) 私はビールを飲んだだけだ (≒私はビールしか飲んでいない)。/?ビールだけ飲んだ。これからワインや美味しい料理がでてきて盛り上がるころなのに、急に帰らなければならないなんて、残念だ。【認識態度】
(安部 1999: 33, 括弧内は筆者)

ここまで日本語「だけ」の用法変化を概観したが、韓国語‘만’と異なり、新井(2014)で示した用法変化モデルに沿い、本稿では修正しない。【評価】用法は語用論的に発生すること、また特立のとりたて助詞「は」の働きが大きいことを踏まえ、【評価】を「だけ」のみの用法と考えていいかはまだ議論の余地が残るため、括弧付でモデルに組み込む。

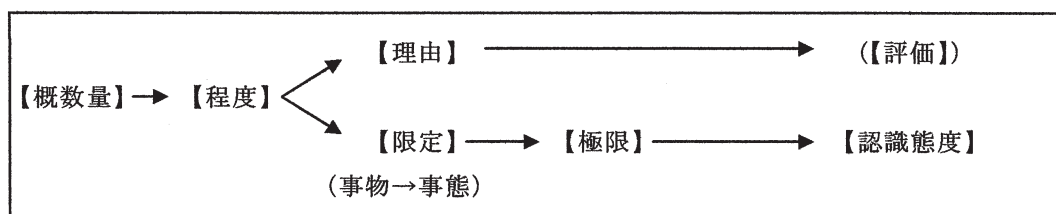


図3 日本語「だけ」の用法変化 (新井 2014 と同様)

4. 1. 3. 用法変化の日韓対照

本稿での修正を反映して、韓国語‘만’と日本語「だけ」の用法変化をまとめ直すと次の図4のようになる。

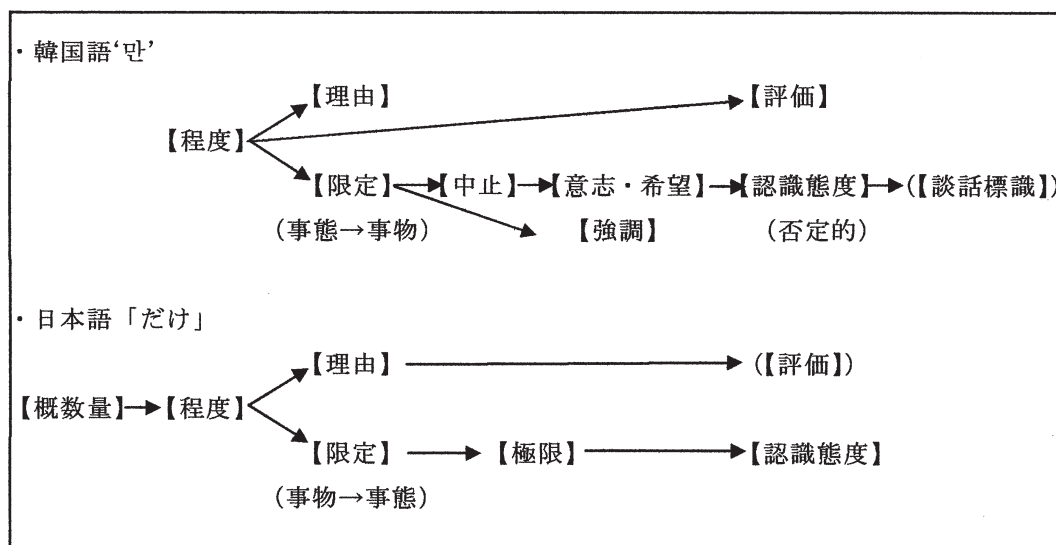


図4 韓国語‘만’と日本語「だけ」の用法変化 (本稿)

韓国語‘만’, 日本語「だけ」共に【程度】、【限定】という用法変化を見せ

ている点は先行研究でも指摘される通りだが、他に【程度】から【理由】が派生している点、【認識態度】という意味用法を獲得している点で共通している。しかし、【概数量】や【中止】等、一方には観察されるが、もう一方には観察されない意味用法も存在し、日韓で違いが見えることが図 4 より確認される。次項より先では、こうした共通性と相違性について（間）主観化研究の観点から考察していく。

4. 2. (間) 主観化という共通性

まず日韓の共通性を見る。前述の通り、韓国語‘만’, 日本語「だけ」共に【程度】から【限定】、【程度】から【理由】に派生する点の他、【認識態度】という意味用法を獲得している点で共通している。【認識態度】とは、事態に対する話者の肯定的あるいは否定的な態度というモーダル(modal)な意味を表している。また「だけ」は【評価】、‘만’は【強調】、【意志・希望】という用法を備えるようになった。具体的な用法変化こそ異なるものの、【評価】、【意志・希望】共に【認識態度】の同様にモーダルな意味を表しており、やはりモーダルな意味用法の獲得という点で共通点が見られる。本稿の目的は韓国語における(間)主観化現象を考えることにあるが、ここで改めて(間)主観化の定義を確認する。

(1) (間) 主観化 ((Inter)subjectification; Traugott1995)

- a. 「内容」を表す意味が話し手の主観的な信念状態・態度を表すようになる。(主観化)
- b. 話し手の主観的な信念状態・態度を表す意味が聞き手志向的な意味を表すようになる。(間主観化)

[再掲] (Traugott(1995: 31), 澤田編(2011: xxxii))

(1a)が主観化の説明であるが、「話し手の主観的な信念状態・態度」というのはモダリティのことに他ならない。つまり、【認識態度】や【評価】、【意志・希望】というモーダルな意味の獲得は、主観化の方向に従っていると言える。こうした主観化というのは、類型論的研究から通言語的に見られることが示唆されており、韓国語‘만’と日本語「だけ」もその例外ではないということである。また韓国語‘만’における【意志・希望】から【認識態度】への用法拡張は、拘束的モダリティから認識的モダリティへの用法変化であり、これもまた主観化の方向に当てはまっている。

(1b)の間主観化の説明にもあるように、主観化が進行すると、モーダルな意味が聞き手志向的な意味を表すようになる間主観化の傾向が見える。日本語の「だけ」にはこうした間主観化は見られなかったが、韓国語‘만’の東南方言形は、談話の進行を補助する【談話標識】という聞き手志向的な意味を

備えており、間主観化が起こっていると言える。日本語は標準語のみを、韓国語は標準語だけでなく地域方言までを分析対象にしたという相違点こそあるが、日本語の地域方言にも、管見の限り、「だけ」を【談話標識】として用いる例は見つからない。つまり日本語「だけ」も韓国語‘만’も（間）主観化の方向をとるといえる点では共通しているが、その進行具合は、日本語は間主観化が起こるに至っていないのに対して、韓国語の方がさらに進行し、間主観化まで起こっていると考えられる。これまでの（間）主観化先行研究では、日本語のある言語現象を、言語類型論的に類似している韓国語のそれと対照することにより、日本語の方が（間）主観化が進行していると結論付けるものが大半であったが、韓国語‘만’と日本語「だけ」はそうした先行研究の指摘とは異なる、（間）主観化の事例である。ここまでの議論をまとめると次の図のようになる。

それでは、なぜこうした相違性が生じるのであろうか。次項ではその背景を言語学的構造の違いに求めて探っていく。

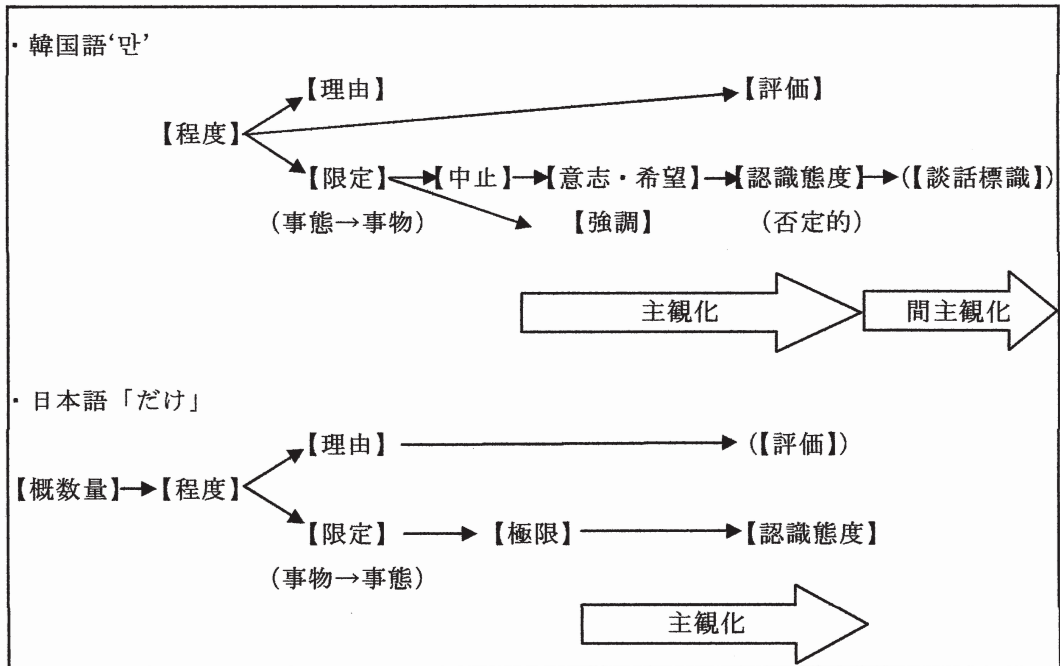


図5 韓国語‘만’と日本語「だけ」に見られる（間）主観化

4. 3. (間) 主観化の相違性

前項では韓国語‘만’と日本語「だけ」の用法変化は（間）主観化という共通性を備えることを明らかにしたが、両表現の用法変化には異なりも見られる。これまでの議論や図 4~5 から明らかにされている日韓の用法変化の違いをまとめると次のようになる。

- ① 「だけ」のみに【概数量】用法が見られる。
- ② 【限定】用法は「だけ」が事物→事態であり，‘만’は事態→事物である。
- ③ 【評価】用法に至る条件，過程が異なる（語用論的，「は」の働き）。
- ④ 「だけ」のみに【極限】用法が見られる。
- ⑤ ‘만’のみに【中止】，【意志・希望】用法が見られる。
- ⑥ ‘만’のみに【強調】用法が見られる。
- ⑦ ‘만’のみに【談話標識】用法が見られる（東南方言）。

本項では前項とは対照的に，韓国語‘만’と日本語「だけ」に見られる（間）主観化の相違性について考察する。（間）主観化の相違性の背景を①語彙，②統語構造，③表現構造という言語学的構造から探っていく。相違性の背景を明らかにすることで，（間）主観化と言語学的構造の関係について考えていきたい。

4. 3. 1. 語彙による相違性

最初に語彙による相違性について考える。先に挙げた用法変化の違いのうち，語彙によるものと考えられるのは次の①，②，④，⑥の四点である。下記に再掲する。

- ① 「だけ」のみに【概数量】用法が見られる。
- ② 【限定】用法は「だけ」が事物→事態であり，‘만’は事態→事物である。
- ④ 「だけ」のみに【極限】用法が見られる。
- ⑥ ‘만’のみに【強調】用法が見られる。

まず，①韓国語‘만’には【概数量】用法が見られないのに対して，日本語「だけ」はそれが見られる点について考察する。‘만’はその語源が明らかにされていない一方で，「だけ」は「丈」という「長さ」に由来することは先に述べた。「長さ」とはまさに数量を表す表現であり，そうした語源的意味が日本語「だけ」の【概数量】という用法を生んだと考えられる。韓国語‘만’にはそうした用法が見られないことから，あくまで推測の域を出ないが，その語源は「長さ」など数量を表すものではないのかもしれない。

続いて，④「だけ」のみに【極限】用法が見られる点を考える。【極限】用法はスケール性が関与することを4節で前述したが，先にも指摘したように「だけ」の語源は「長さ」であり，スケール性どころかスケールそのものである。‘만’も「だけ」同様に【程度】用法を備えはするものの，そもそも語源がスケールである「だけ」にスケール性という意味の強さで及ぶとは考えづらい。そのため，「だけ」は【極限】用法を備えた一方で，‘만’はそうした用法が生じなかった。ここでもやはり語源の違いが用法変化に大きく影

響を与えたことが示唆される。

ここまで日本語「だけ」と韓国語‘만’の違いに潜む背景を語源という語彙的要因に求めてきたが、残る②、⑥の背景は一体何であろうか。②にあるように、【限定】用法は「だけ」が事物→事態であるのとは対照的に、‘만’は事態→事物と全く対照的な様相を見せている。この違いについても語源の影響が考えられるが、先の①、④とは異なり、語源の意味ではなく品詞にその理由を求める。박진호(1995)でその可能性が指摘されるように、【限定】を表す‘만’はもともと用言の冠形詞形に後接する依存名詞であったと考えられる。これによりは‘만’は前接要素が用言に限られるため、用言のプロトタイプの意味である事態を【限定】するに限られた。一方、「だけ」は語源が「丈」であることから明らかなように本来、完全名詞であり、それが形式名詞、とりたて助詞と文法化していったのであり、前節要素は特定のものに限られていたわけではない。その中で、通時的観点も踏まえた新井(2014)で要約されるように、名詞と結びついて【程度】を表す複合語となり、それが【限定】用法につながったことから、前節要素が名詞である場合が主だったと考えられる。名詞のプロトタイプの意味は事物であるため、「だけ」の【限定】用法は事物の【限定】から始まっていると考えられる。このように、「だけ」、‘만’は共に【限定】用法を備えるが、語源の品詞の違いから、当初は限定する対象が異なっていたと考えられる。その後、両者共、【限定】の対象が拡大して、事物、事態を【限定】するようになったのは周知の通りである。

本項の最後に⑥について考察する。①、④では「だけ」にのみ見られる用法の原因を探ったが、⑥にあるように‘만’のみに見られる用法として【強調】用法が挙げられる。【強調】用法は副詞や副詞的連用語尾などに‘만’が後接することで生じるが、上述のように、【限定】の‘만’は本来、用言が主に表す事態を【限定】するものであった。そのため、同様に事態を表す副詞等も【限定】することが比較的容易であり、それが【強調】用法につながったのではないだろうか。³¹⁾一方、「だけ」はもともと、名詞が主に表す事物を【限定】するものであったため、そうした【強調】用法は見られない。つまり、先の【限定】の拡大方向と同様に、語源の品詞が【強調】用法の有無に大きく関わっていると考えられる。

ここまで‘만’と「だけ」の用法変化のうち、①、②、④、⑥に注目して、その原因を探った。分析の結果、①と④は語源の意味の違い、②と⑥は語源の品詞の違いに由来するものであることが示唆された。このように、「だけ」と‘만’の用法変化の違いが生じる要因の一つとして語源という語彙による相違性を確認できる。

4. 3. 2. 統語構造による相違性

次に以下の⑤, ⑦の違いが生じる原因について統語構造という観点から考える。

- ⑤ ‘만’のみに【中止】，【意志・希望】用法が見られる。
- ⑦ ‘만’のみに【談話標識】用法が見られる（東南方言）。

⑤にあるように「だけ」と異なり，‘만’には【中止】，【意志・希望】用法が見られる。この用法は，‘만’に指示冠形詞の‘그’が前接した‘그만’が副詞として用いられる際に現れるものだが，(22)のように，二次的な意味として【中止】用法が生じることを先に確認した。こうした用法は日本語「だけ」には見られないものである。³²⁾

(22) 그만 먹어라. 【中止】

一次的：그 정도까지만 먹어라. 【限定】

二次的：그 이상은 먹지 말라. 【中止】

[再掲] (이기갑 2009: 46)

それではなぜ日韓でこうした違いが生じるのであろうか。(22)では「食べる」という動作の中止を求めており，‘그만’がその動作を否定していることになる。日本語も韓国語も用言に特定の形式がつくことにより否定が表現されるが，その表現の仕方には差異点がある。

(43) a. 나는 학교에 가지 않는다. 〈後置否定〉

b. 私は学校に行かない. 〈後置否定〉

(44) a. 나는 학교에 안 간다. 〈前置否定〉

b. *私は学校にない行く. 〈前置否定〉

[以上，作例]

(43)ではそれぞれ‘가다’，「行く」に否定形式が後続して否定を表すものであり，共に文法的である。こうした後置否定は日本語にも韓国語にも共通して見られるが，一方で，(44)のような違いが見られる。日本語では(44b)のように，否定形式を前に置いて否定を表現するのは漢語を除いて非文であるが（例：非常識，不完全，未解決），韓国語では(44a)のような前置否定が可能である。またこうした前置否定形式は‘안’に留まらず，他に以下の‘못’や‘덜’が挙げられ，日本語と異なる韓国語の特徴である。³³⁾

(45) 발표를 못 들었다.

(46) 논문을 덜 읽었다.

なお韓国語の前置否定は次のように, 後置否定と同様に中世語からも見られたものであり, 通時的に見ても韓国語の特徴だと言うことができる。³⁴⁾

(47) 그되^는 아니 듣즈^뻬더시^넛가 (前置否定)

(그대는 아니 듣고 겨졌소)

(48) 耶輸 | 손직 듣디 아니 하시고 (後置否定)

(야수가 오히려 듣지 아니하시고)

[釋譜詳節] (고영근 2010: 242)

同じ膠着語であり, SOV という基本構造を備える日本語と韓国語は統語構造が類似していると言われるが, ここまで見てきたように, 否定形式は, 日本語が後置形式のみである一方で, 韓国語は前置形式も後置形式も可能であるという違いが見られる. そしてこの違いは, (22)のように‘그만’が後続の動詞‘떡다’を否定している点と平行的である. つまり‘그만’が後続の動詞を否定し, 【中止】の用法を備えるのは, 前置否定形式が可能な韓国語の統語構造によるものと考えることができる. 一方, 日本語は後置否定形式のみが可能であるため, 【中止】用法を備えることができず, ここに統語構造の違いが反映されている可能性を指摘できる.

さらに前述の通り, ‘그만’は【意志・希望】というモーダルな意味も獲得する. これは先行事態を【中止】し, 後行の新しい事態を始めようとするために生じる用法である. 先行事態の【中止】が前提となっているため, 韓国語‘만’と日本語「だけ」における【意志・希望】の有無の違いは, やはり統語構造の違いによるものと考えられる.

なお新井(2014)では, ‘만’が「だけ」と異なり, 【認識態度】は否定的なものしか表さないと述べた. しかし本稿で‘그만이다’という表現を分析の対象に入れることにより, ‘만’も「だけ」と同様に肯定的, 否定的の両方の【認識態度】を表し得ることを示した. 実はこの【認識態度】の表し方にも統語構造が大きく関係することを明らかにしていく.

前述の通り, 「だけ」に助動詞「だ」が接続した「だけだ」は前に主に用言の非過去形がつくか, 過去形がつくかによって, それぞれ肯定的な【認識態度】, 否定的な【認識態度】を表す. これは, 「だけ」が後接して前景化される前提集合が話者の主観的色付けがなされた集合であり, 非過去形ならば, その事態はまだ実現していないため, 今後の実現に対する肯定的な態度を表すようになり, 過去形ならば, その事態はすでに実現済みで, 今後はどうしようもないという否定的な態度を表すようになるためであろう.

一方, 韓国語の‘그만’は(24)のように後行事態に前接されることで【認識

態度】を表すが、表現されるのは否定的なものに限られる。その理由として、以下の説明を与える。‘그만’における‘만’は元来、【限定】用法のものであったことは先に述べたが、その‘만’が限定し前景化するのは前接の指示連体詞‘그’である。そのため、後接の内容には焦点は当てらず後景化する。またそれまで‘그만’は後件の事態を否定してきたが、次第に文に対する否定は薄れ、事態に対する否定的な感情というモーダルな意味を表すようになる。³⁵⁾そのため、焦点を当てられなかった後件に対して、否定的な【認識態度】を表すようになると推測される。それに対して、‘그만이다’の場合は、前接の指示連体詞‘그’を‘만’が限定し前景化する点は、先の‘그만’と変わらないが、後に接続するのは繁辞‘이다’であるため、後景化する要素はない。そのため、‘그만이다’全体が前景化されたものとして(26)のように肯定的な感情というモーダルな意味を表すと考えられる。

(24) 오랜 병 끝에 그만 세상을 뜨고 말았다. 【認識態度】

[再掲] (이기갑 2009: 46)

(26) 이 집 고기 맛이 그만이다 【認識態度】

[新井(2014)への講評コメント再掲]

以上のように韓国語‘만’も日本語「だけ」も共に【認識態度】を表すものの、肯定的なもの、否定的なものを表し分ける方法は異なる。日本語の場合は前接用言のテンスによる一方で、韓国語の場合はその統語的位置による。韓国語の‘그만’は後行事態に前接する副詞として利用できる一方で、繁辞‘이다’が後接して形容詞としても用いられる。副詞的利用を可能にしたのは、前述の【中止】、【意志・希望】用法派生に大きく関与した、前置否定形式を備える韓国語の統語構造である。

最後に⑦の‘만’のみに【談話標識】用法が見られる点について考える。‘그만’の東南方言形である‘고마’は否定的な【認識態度】を表すだけでなく、(28)のような【談話標識】の機能を持つ。これは否定的な【認識態度】を表していた‘고마’が前件の不明示や否定的な感情の弱化により、ただ強調する効果を持つようになるためであるが、もともと‘고마’が副詞として用いられていたことが、文中の【談話標識】機能を獲得することの一助になったのではないだろうか。そのように考えると、結局のところ、‘그만’あるいは‘고마’の副詞的利用を可能にした統語構造が【談話標識】用法派生の背景にあると

言える。

(28) 우리느 고마 이리 고마 시미르 영꼬 이리 늑꼬 나서는 고마
자속드리 아:무건또 하지마라캐. 【談話標識】

(우리는 그만 이렇게 그만 힘이 없고 이렇게 늑고 나서는 그만
자식들이 아무것도 하지 말라고 해.)

[再掲] (이기갑 2009: 63)

韓国語‘만’と日本語「だけ」の用法変化は共に主観化の経路を辿るが、韓国語の方が東南方言を考察に入れているものの、主観化が更に進み、聞き手志向の意味である【談話標識】の機能を備えるという間主観化の傾向が見えることは、先に示した。こうした日韓の(間)主観化の進行度の違いの主たる要因の一つを、こうした前置否定形式の有無という統語構造の相違性に求めることができるのではないかと考えられる。

4. 3. 3. 表現構造による相違性

ここまで‘만’と「だけ」の用法，用法変化の違いのうち，七つの違いについて，語彙と統語構造の相違性からその原因を求めた。最後に残された違いは以下のものである。

③ 【評価】用法に至る条件，過程が異なる（語用論的，「は」の働き）。

日韓共に【評価】用法が見られるが，日本語「だけ」の【評価】用法は【理由】から派生している。

(36) 自分のしたことがわかっているだけに，つらかった。【理由】【評価】

[再掲] (日本語記述文法研究会編 2008: 135)

(37) 5年間も留学していただけあって (だけのことはあって)，佐藤の英語力はたいしたものだ。【理由】【評価】

(38) 鈴木は持久力に優れている。さすが元陸上選手だけのことはある。【理由】【評価】

[再掲] (以上，日本語記述文法研究会編 2009: 53，括弧内は筆者)

この中で(36)のような「だけに」の【評価】用法は語用論的に発生するものであるのに対して，「だけのことはある」，「だけあって」はその形式本来の用法として【評価】が認められることを前述した。益岡(2011)では，「Xダケノコトハアル」は「Xというスケール(ダケ)の事態(コト)が存在する(アル)」ことを助詞「ハ」で取り立てる内容となると述べられている。

これにより「だけのことはある」も、それから派生した「だけあって」も【評価】用法を備えるようになる。(37)では「5年間もの留学期間というスケールの事態の存在」、(38)では「元陸上選手であるほどの陸上能力というスケールの事態の存在」を取り立てているが、それが可能になる前提は、「こと」という事態化の形式名詞が用いられることである。韓国語にも「こと」に相当する依存名詞‘것’があるが、【程度】、【理由】を表す‘만큼’は前接しない。これは「の」に当たる属格助詞‘의’が媒介する場合も同様である。このように「こと」に比べて‘것’は前接要素が限定される理由としては、日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造（金恩愛 2003）という表現構造の相違が考えられる。³⁶⁾日本語は名詞志向構造であるため、スケール性を持つ「だけ」と事態化の形式名詞「こと」を「の」でつなぐことが可能である。そのため、「Xというスケール」を事態化し、その存在を「は」で特立することで、【評価】の意味を持ち得る。一方、動詞志向の韓国語は‘만큼’と‘것’を‘의’で接続できないために、このようなメカニズムは働かない。このように【評価】用法が【理由】用法から派生するかどうかは日本語と韓国語の表現構造の相違性に由来するものと推測される。(38)を‘만큼’に用いて韓国語に訳すとすれば、以下のように用言が必要になり、ここにも韓国語の動詞志向構造という表現構造が見える。³⁷⁾

(38') ...과연 이전에 육상 선수였던 만큼 (?)살력이 뛰어나다/뛰어난 실력이다.

なお現代韓国語‘만’の【評価】用法は(19)のように【程度】用法から直接派生している。日本語「だけ」と異なり、用言‘하다’が直接‘만’に接続して、‘만’の表すスケール性を事態化せずに評価しているが、韓国語の表現構造が動詞を含めた用言を志向することとの関連が示唆される

(19) 일본은 한 번 가 볼 만하다. 【評価】

[本稿への査読コメント再掲]

先に「だけ」と‘만’によって表される【限定】は、それぞれ、事物→事態、事態→事物という対象の拡大方向を見せると述べたが、事物は主に名詞、事態は主に動詞によって表現されるものであり、こうした出発地点の違いも、日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造を表しているのかもしれない。

前節で韓国語‘만’には【認識態度】というモーダルな意味の獲得から、さらに進み【談話標識】の用法も備えるという間主観化が起こっている一方で、日本語「だけ」は主観化の段階に留まり、【認識態度】を表すに過ぎないこ

とを述べた。しかし日本語「だけ」は【認識態度】とは別に、【評価】というモーダルな意味を備えている。一方で韓国語は【意志・希望】から派生した【認識態度】の他に、【強調】というモーダルな意味を備えており、主観化の方向は同じであっても経路は異なる。そしてこうした日韓の違いの背景には、日本語の名詞志向構造、韓国語の動詞志向構造という表現構造の相違性が潜んでいると考えられる。

4. 3. 4. まとめ

ここまで‘만’と「だけ」に見られる（間）主観化の相違性について考察してきた。用法変化の相違性が生まれる言語学的構造の要因としては、「だけ」は完全名詞「丈」、‘만’は依存名詞が語源であるという語彙の相違性、日本語は後置否定形式のみであるのに対して、韓国語は前置否定形式もとるという統語構造の相違性、日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造という表現構造の相違性が考えられる。日韓両言語は共に膠着語であり、基本語順がSOVであるという共通点を備え、類型論的に類似しているといっても、完全に同じ言語学的構造であるということはもちろんなく、構造差が見られる。そうした構造差が‘만’と「だけ」の（間）主観化に違いが生じる要因となっている。³⁸⁾韓国語‘만’はモーダルな意味である【強調】、【意志・希望】、【認識態度】、【評価】の他に【談話標識】（東南方言）という聞き手志向の意味を獲得し、主観化から更に進んだ間主観化の傾向も見えるのに対して、日本語「だけ」は間主観化の傾向が見えないどころか、主観化の経路も異なる。本節の‘만’と「だけ」の分析を通じて明らかになった、（間）主観化と言語学的構造の関係を図示化すると次の通りである。³⁹⁾

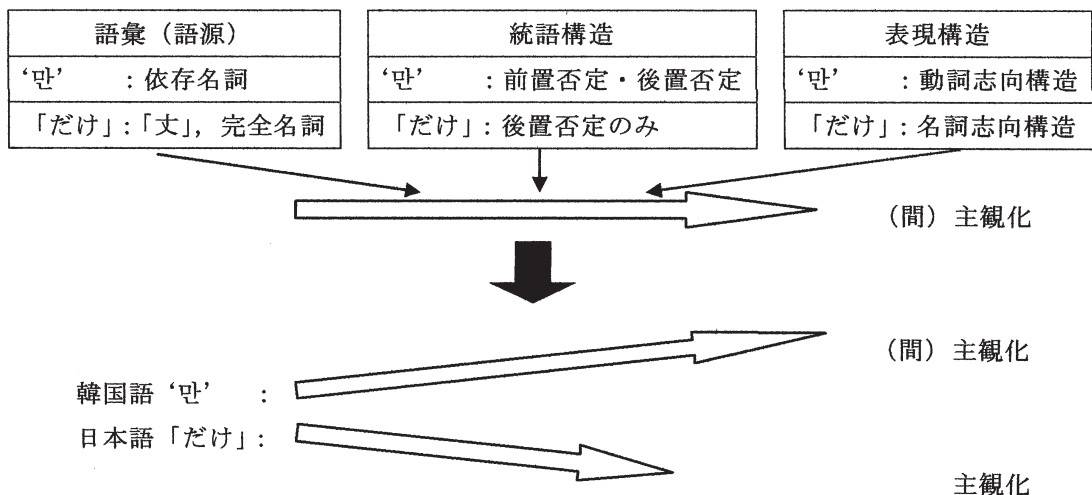


図6 ‘만’と「だけ」に現れる（間）主観化と言語学的構造の関係

2節で(間)主観化の日韓対照を扱った先行研究を概観したが、その大半が韓国語よりも日本語の方が(間)主観化が進行していると述べている。しかし、本稿で扱った‘만’と「だけ」の対照研究は、そうした大半の先行研究の指摘とは異なる結果となっている。

それではなぜ、大半の先行研究が同じような指摘に留まっているのだろうか。もちろんこれまでの先行研究を見てもわかるように、日本語と韓国語では、日本語の方が(間)主観化が進行した言語現象が多いことは紛れも無い事実であろう。しかしその一方で、類型論的に類似した日韓両言語における特定言語現象の用法変化を対照する上で、両言語共に文末表現が重要であることを過度に前提視した研究者の視点が、韓国語よりも日本語の方が(間)主観化が進行しているという結論を過分に招いてしまうのではないかと考えられる。

(49) 本章では、日韓両語の文末形式の語用論的意味拡張・獲得現象を歴史語用論と言語類型論を複合させた観点から対比分析した。両言語における「文中形式」から「文末形式」への変換というプロセスの生産性は、SOV言語における語用論的意味変化の開始地点としての「文末」の重要性を示している。

(堀江・金 2011: 207)

上記研究は紛れもない事実であるが、日韓対照を行った多くの(間)主観化先行研究は主に文末表現という同一位置にある文法表現の対照に留まっている。しかし前述のように、日本語と韓国語の言語学的構造は完全に一致するものではない。共に膠着語であり、基本語順がSOVである日韓両言語は文末表現が文全体の意味決定に大きな影響を持つのは否定し得ない事実であると考えられるが、本稿の分析から、韓国語の方が日本語よりも、用法変化が文中表現に起こり、文全体の意味決定が文中表現に依存する可能性も指摘し得る。日本語には見られない前置否定形式が韓国語に見られる点の他に以下のような構文をその例として挙げるができる。

(50) 날이 추운데 따뜻하게 입어.

[국립국어원 2015]

(50') ??寒いから暖かく着ろ／寒いから着て暖かくしろ.

上記例で服を着る目的である「暖かくすること」は韓国語例では文中で表現されているのに対して、日本語訳では文末に表現した方が自然である。⁴⁰⁾

また言語学的構造差と関連して、言語の変化というのは、文末表現だけでなく文中表現など様々な表現に及ぶことは、本稿で対象とした‘만’と「だけ」

を見ても明らかである。(間)主観化を始めとする用法変化を対照する上で、同一位置にある文法表現のみを分析対象としなければならない理由はどこにもない。通言語的に見られる(間)主観化を対照研究する上で、先行研究のように同一位置にある表現のみを対照するのではなく、個別言語の言語学的構造を深く考慮して、異なる位置にある様々な文法表現まで分析対象を拡大する視点を持つことが今後必要になるであろう。韓国語・日韓対照を扱った(間)主観化研究の中心をこれまで成してきたのは、2節で述べたように、欧米の一般言語学理論を専攻する英語研究者や類型論研究者、日本語研究者であるが、それだけではやはり不十分である。韓国語の構造をよく知る韓国語学専門の韓国語研究者の観点から韓国語の(間)主観化研究が行われることが望まれる。また日韓対照の場合も両言語の構造をより深く考慮した分析が必要である。こうした視点は韓国語学や日韓対照研究だけでなく、(間)主観化研究一般の発展にも寄与するものと期待される。

5. おわりに

本稿では、(間)主観化という通言語学的に見られる概念を確認した上で、韓国語という個別言語における(間)主観化の言語現象例として‘-(으)ㄹ래’, ‘-어야지’, ‘-더-’の意味用法とその変化を鳥瞰した。先行研究で体系的な指摘こそ成されていないものの、これは(間)主観化の経路を辿っていることが確認される。(間)主観化という概念は韓国語学にも有用であると同時に、(間)主観化研究にとって韓国語は新たな研究対象としての可能性を持っていると言える。また大部分の先行研究の指摘と異なり、日本語よりも韓国語の方が(間)主観化が進行している例として‘만’と「だけ」の用法変化を挙げ、(間)主観化の相違性の背景には、語彙、統語構造、表現構造の相違が潜んでいることを明らかにした。韓国語と日本語は類型論的に類似しているが、言語学的構造が完全に同一であるわけではなく、通言語学的に見られる(間)主観化には個別言語の言語学的構造が反映される。やはり韓国語の(間)主観化研究には韓国語の言語学的構造をよく知る韓国語学の視点が望まれる。そしてその視点は韓国語学だけでなく、日韓対照研究、(間)主観化研究一般の発展にも寄与するものと期待される。

韓国語における(間)主観化研究に新たな視点を提供することが本稿の目的であったが、その中で韓国語学と言語学の融合の必要性が浮かび上がってきた。「狭く深い」分析となりがちな韓国語学と「広く浅い」分析になりがちな言語学が協力しあうことにより、「広く深い」分析が可能となるだろう。⁴¹⁾そしてもちろんこれは韓国語研究だけに限った話ではなく、全ての言語研究に当てはまるものである。⁴²⁾

《註》

- 1) 本稿では(間)主観化を主観化, 間主観化の両方を表す術語表現として使用する。(間)主観化については次節を参照されたい。
- 2) 歴史語用論とは‘Historical Pragmatics’という術語の日本語訳であり, 歴史言語学と語用論が融合した学問分野である。1990年代後半に萌芽した新たな学問分野と言え, 日本でも近年, 高田他(2011), 金杉他(2013), 金水他(2014)のような歴史語用論に関連する専門書が出版されている。また野田他(2014)では歴史語用論という術語こそ用いていないものの, 歴史的な日本語の配慮表現に注目した語用論的分析を行っている。そうした日本の状況とは対照的に韓国では, 歴史言語資料に語用論的アプローチを適用した研究は少なく, ‘Historical Pragmatics’の韓国語訳に当たる‘역사화용론[歴史話用論]’という術語表現は管見の限り, 用いられていない。参考までに中国では「历史语用学[歴史語用学]」という術語が使われ始めているものの, やはり先行研究は少ないようである。
- 3) 本稿で用いる韓国語学という術語には, 韓国における国語学も含まれる。
- 4) 本稿では特定の言語現象の用法変化を(間)主観化の例として総体的に俯瞰し, (間)主観化研究に新たな視点を提供することを主目的としているため, 個別の先行研究を無批判に受け入れてしまった部分も少なくない。本稿で整理した用法変化は都合のいい青写真に過ぎない可能性もある点を申し添えておく。
- 5) 澤田編(2011)では「指向」という翻訳を用いているが, 本稿では「志向」に統一する。
- 6) 他二例の詳細は澤田編(2011)を参照されたい。
- 7) (間)主観化は変化の要因として文法化の議論の中で強い関心を引くことが多いが, その変化は一般的なものであり, 文法化に限るものではない(Traugott&Dasher2001)。これは本稿で挙げる現象例を見ても明らかである。
- 8) 参考までに中国語でも subjectivity は「主観性[主観性]」, subjectification は「主観化[主観化]」と訳されるが, 吳福祥編(2011)に見られるように, Traugott と Langacker の定義が混合されている。
- 9) “Journal of Historical Pragmatics”は2000年に創刊し, 2015年までに16号を数える。
- 10) 2007年刊行の vol.8:2 が ‘Historical Change in Japanese: Subjectivity and intersubjectivity’ という特集号を組んでいる。
- 11) この関連先行研究リストは筆者の狭い管見によるものであり, 他の関連先行研究の存在を否定するものではない。
- 12) 表中の【】内は, 当該論考における意味用法名を表す。以下の部分についても同様。なお本稿では特定言語現象の意味用法とその変化を鳥瞰して, (間)主観化の観点から捉え直すことを目的としているため, 意味と用法を区別せずに用いる。
- 13) 以降の各項の意味用法紹介部分は, 該当表現を扱った先行研究を要約したものであることをここに明記しておく。
- 14) 박재연(2006)内では行為モダリティ(행위 양태)という訳語が用いられている。
- 15) 박재연(2006)が規定した認知的モダリティの概念的意味領域では, ‘-더-’は以下のよう
に説明される。
 - a. 情報の獲得方法: (過去) 知覚
 - b. 情報の内面化程度: 新しく知る
 - c. 聞き手の知識に対する仮定: 未知仮定また近年の研究では, モダリティとは別の文法範疇としてエヴィデンシヤリティ(evidentiality)を設定することもある。この場合, ‘-더-’もエヴィデンシヤリティの中に置かれることになるが, 本稿は(間)主観化の例を指摘することが目的であるため, モダリティの一種として捉える。
- 16) 中世韓国語の‘-더-’に関する先行研究は高橋(2013)によくまとめられている。
- 17) 金珍娥(2013)では‘-더라’の他に引用の形式が付け加わった‘-더라고’の形式も扱っている。その中で‘-더라고’は引用形とは一線を画し, 引用の機能ではなく, (体験客体化)と(主観性)のムードを司ることで(緩衝表現)として機能することを述べている。詳細は金珍娥(2013)を参照されたい。

- 18) 参考までに日本の国語学, 日本語学の観点から行われた(間)主観化研究として金水(2011)がある.
- 19) (間)主観化の要因としてはポライトネスやコンテクスト依存度のような社会文化的要因も挙げられる. しかし後述のように, 本節では(間)主観化と言語学的構造の相関関係を探ることを目的とするため, 社会文化的要因については考察の対象としない.
- 20) 本節は新井(2014)の実質的な続篇に当たるものである. 記述研究に留まった新井(2014)とは対照的に, 「だけ」と‘만’の用法変化を(間)主観化という理論研究から捉え直した. 新井(2014)掲載時に匿名の講評者より有益な査読コメントをいただいたほか, 読者の先生方からも有益な御指摘をいただいた. この場を借りて感謝申し上げる. もちろん修正を最大限反映できなかった部分や誤りは全て筆者に帰するものである.
- 21) 新井(2014)では日本語「だけ」, 韓国語‘만’の順に各用例や用法変化モデルを提示したが, 本稿では韓国語の(間)主観化に焦点を当てるため, その提示順を逆とする. 以下同様. 両表現の用法変化の詳細は新井(2014)を参照されたい.
- 22) 新井(2014)では以下の様な依存名詞‘만’の例も【程度】用法の一環として挙げたが, 李賢熙(2014)では「程度、限定の‘만’, ‘마’は去声の声調を持つ. ‘여덟 마내’の‘만’は上声の声調を持つだけでなく統合関係も異なるため, これらと一緒に扱ってはいけない」と述べられている. そのため, 本稿では新井(2014)を修正し, 依存名詞‘만’を【程度】用法として考えない.

· 친구가 도착한 지 두 시간 만에 더났다.

[국립국어원 2015]

- 23) 정연희(2012)は 15 世紀から現在に至る‘-을 만하다’の用法の通時的変遷を分析し, 【程度】から〈可能〉, 〈価値〉へと拡張することを述べた. ただし〈可能〉用法として挙げた次の例は【程度】としても解釈できると述べられている.

· 送使너피 하는 일을 보면 만디 당이라도 호만기도다 【程度】

[隣語大方] (정연희 2012: 273)

また〈価値〉用法の具体例についても特定副詞との共起を指摘しており, 〈価値〉は【程度】の二次的意味であることを示している.

· 소상과 단청을 대 새로 등슈키엿는다라 그중 볼 만히더라 가운데

[乙丙燕行錄] (정연희 2012: 274)

しかし(19)の例からも明らかのように, 現代語の‘만하다’は特定副詞と共起せずとも【評価】を表し得るため, 本稿では新井(2014)を修正し, ‘만하다’の【評価】用法を認める立場を採る. なお정연희(2012)では【程度】から〈可能〉, 〈価値〉への用法変化の原因として, 語用論的推論, 抽象化と隠喩, 形態的变化の他に, 本稿の主題である主観化を挙げている.

- 24) 洪思滿(1979)は‘만’の意味分類として〈強調的添意〉を設定している. (21)の例だけでは, ただ前接副詞の意味が【限定】されて強調されているだけであり, 別途, 【強調】という用法を設定する必要はないと思われる. しかし(21’)と比較すると, (21), (21’)では強調及び感嘆の意味機能で‘만’, ‘도’がそれぞれ用いられているが, 同じ強意的添意である両者は意味・用法において微細な差異を見せている(洪思滿 1979: 34).

(21’) 話者 A: 어때? 빨리 달리지?

話者 B: 아니. 빨리도 달린다. 【強調】

(洪思滿 1979: 34)

(21)は否定疑問文に対する回答として‘만’が用いられており‘만’は相反的強調・感嘆を表

す一方で、(21')では肯定疑問文に対する回答として‘도’が用いられており、共感的強調・感嘆を表す(洪思滿 1979: 34)。このように‘만’は副詞をただ【限定】するのではなく、話者の聴者に対する相反的なモダリティを表すことが示唆されるため、新井(2014)や本稿では洪思滿(1979)に倣い、別途、【強調】という用法を設ける。なお【強調】を表す他の用例として、洪思滿(1979)では次のように、用言の副詞的連用語尾や‘야’に後続する例を挙げている。

- 이 서류를 받아만 주십시오.【強調】
- 생활을 보장되어야만 능력을 나타낼 수 있다.【強調】

(洪思滿 1979: 35-36)

- 25) 이기갑(2009)は東南方言‘고마’の分析を主眼に置いているため、‘만’に指示冠形詞‘그’が前接した‘그만’のみを扱っているが、他の指示冠形詞‘이’, ‘저’が接続した‘이만’, ‘저만’も存在する。これらの意味用法は一致せず、相違点も少なくないが、本稿は‘만’の用法変化を概観するため、複合語とは言えども‘만’からの用法変化が比較的明らかな‘그만’のみを扱う。なお李賢熙(2014)では‘이만’, ‘그만’, ‘저만’の三形式について少考を加えている。
- 26) 【意志・希望】用法には、後続文が命令文と勧誘文、希望や意志を表す叙述文や疑問文に限られるという統語的制約があり(이기갑 2009: 47), 【意志・希望】を‘그만’と捉えていいかには異論も予想される。しかし이기갑(2009: 47)では、(23)は(22)と異なり先行事態が明示されないことを挙げており、本稿でも別途の用法と考える。
- 27) 新井(2014)に対する講評コメントによる。なお‘그만이다’を始めとする‘副詞+이다’構文については최정도・김선희(2009)に詳しい。
- 28) 東京外国語大学大学院博士後期課程・高橋春人氏のご教示による。
- 29) 국립국어원 언어정보나눔터(<http://ithub.korean.go.kr/>)における現代文語コーパスの検索結果である。2015年3月20日閲覧。
- 30) なお本稿では触れられなかった‘만’の用法も存在し得る点は留意しなければならない。李賢熙(2014)は‘X 만하다’の通時的文法研究を志向し、その表現形式、意味が多岐に渡ることから、困難さを指摘している。本稿では扱えなかったが、李賢熙(2014)で言及された‘만’に関する表現として、‘웬만하다’, ‘암만하다’等が挙げられる。
- 31) 洪思滿(1979: 33)によれば、‘만’が副詞に直接連結する場合は、強意限定副詞よりは状態副詞への連結が自由であるというが(例: *가장만, *아주만, 열심히만, 높이만), それもこうした見解を支持する一助となるかもしれない。
- 32) もちろん「それだけ食べる」という表現は「それ以上食べるな」という【中止】用法を表し得るが、あくまでも語用論的に発生した意味であり、「だけ」の用法として【中止】を設けることはできない。
- 33) ‘덜’は語彙的否定であり、‘못’も研究者によっては語彙的否定と解釈されるため、統語的否定である‘안’と同列に語るべきではないという指摘を査読者よりいただいた。ただしいずれの否定形式も表層構造では用言に前接しているという点では共通しており、そうした否定形式からの類推により、‘그만’も後接用言が表す動作を否定する用法を獲得しやすいと思われる。深層構造も考慮した分析は別稿に譲りたい。
- 34) ただし厳密に言うと、(48)の‘듣디 아니하시고’も動詞‘듣다’の語幹に名詞化語尾‘-디’を接続して名詞化した上で、‘아니’が‘하시고’を否定しており(前置否定)形式である。ただし共時的分析との術語の統一を図るため、本稿(後置否定)という術語を用いる。なお고영근(2010)では(短い否定), (長い否定)という術語で区別している。
- 35) 否定を表す表現形式が肯定の意味を備えるようになったものの一例として、ドイツ語のdürfenが挙げられる。詳細はNarrog(2012)を参照されたい。
- 36) 日本語「の」と韓国語‘의’の違いに要因を求めることもできるが、本稿ではそれも包含した表現構造の相違性に要因を求める。
- 37) 韓国語母語話者によると、(37')は前半の形容詞述語文よりも後半の名詞述語文の方が自然であるという。しかし共に‘뛰어나다’という形容詞が‘만큼’に後接して現れている。
- 38) これらは‘만’と「だけ」の用法変化に限られた言語学的構造の要因であり、韓国語と

- 日本語の（間）主観化の違いを一般的に説明するものではない点に留意しなければならない。
- 39) 経路の違いを矢印の垂直的方向で表している。水平的方向は（間）主観化という共通方向を表す。
- 40) 韓国語‘-게’と日本語「-く」の違いとも考えられるが、本稿では、否定形式の位置を合わせて、それをも含んだ文中表現が意味決定に果たす役割の大きさの日韓の違いと考える。しかしこの見解はまだ実証されたとと言えるものではなく、今後精緻な検討が望まれる。今後の課題としたい。
- 41) こうした個別言語学と一般言語学の協力という試みは日本語学においても近年始まったばかりである。代表的な研究として定延(2014)が挙げられる。
- 42) 本稿で触れた歴史語用論も個別言語の歴史言語資料に言語学の語用論的アプローチを適用した研究であり、融合の最たるものであるが、他にも、歴史言語学と社会言語学が融合した「歴史社会言語学」(‘Historical Sociolinguistics’ / ‘Sociohistorical Linguistics’) も日本では学門としての地位を確立しつつある。歴史社会言語学の詳細は高田他(2015)を参照されたい。ただし韓国、中国ではそれぞれの韓国語訳、中国語訳にあたる‘역사사회언어학 [歴史社会言語学]’, 「历史社会语言学 [歴史社会言語学]」という術語は管見の限り、用いられていない。今後の研究の進展が望まれる。

《参考文献》

〈研究図書・論文類〉

- 安部朋世(1999)「ダケの位置と限定のあり方」『日本語科学』6
- 新井保裕(2014)「「だけ」と‘만’に見られる用法変化の日韓対照研究—記述研究—」『韓国語学年報』10
- 金杉高雄他(2013)『認知日本語学講座第7巻 認知歴史言語学』くろしお出版
- 金恩愛(2003)「日本語の名詞志向構造(nominal-oriented structure)と韓国語の動詞志向構造(verbal-oriented structure)」『朝鮮学報』188
- 金珍娥(2013)『談話論と文法論 日本語と韓国語を照らす』くろしお出版
- 金水敏(2011)「丁寧語の起源と発達」高田他編所収
- 金水敏他編(2014)『歴史語用論の世界 文法化・待遇表現・発話行為』ひつじ書房
- 近藤安月子・姫野伴子(2012)『日本語文法の論点 43—「日本語らしさ」のナゾが氷解する—』研究社
- 定延利之編(2014)『日本語学と通言語的研究との対話 テンス・アスペクト・ムード研究を通して』くろしお出版
- 澤田治美編(2011)『ひつじ意味論講座第5巻 主観性と主体性』ひつじ書房
- 高田博行他編(2011)『歴史語用論入門 過去のコミュニケーションを復元する』大修館書店
- 高田博行他編(2015)『歴史社会言語学入門 社会から読み解くことばの移り変わり』大修館書店
- 高橋春人(2013)「中期朝鮮語動詞のアスペクト的クラス」第238回朝鮮語研究会口頭発表資料(未公刊)

- 田島毓堂編(2010)『日本語学最前線』和泉書院
- 日本語記述文法研究会編(2008)『現代日本語文法 6 第 11 部複文』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編(2009)『現代日本語文法 5 第 9 部とりたて 第 10 部主題』くろしお出版
- 野田尚史他編(2014)『日本語の配慮表現の多様性 歴史的変化と地理的・社会的変異』くろしお出版
- 沼田善子(2009)『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房
- 堀江薫・金廷珉(2011)「日韓語の文末表現に見る語用論の意味変化：機能主義的類型論の観点から」高田他編所収
- 益岡隆志(2011)「原因理由を表わすダケニとダケアッテの分化」『日本語・日本学研究』1
- 宮地朝子(2010)「ダケの歴史的変化再考—名詞の形式化・文法化として—」田島毓堂編所収
- 吳福祥編(2011)『汉语主观性与主观化研究』商务印书馆
- 고영근(2010)『제 3 판 표준 중세 국어문법론』집문당
- 문병열(2009)「중세국어 한정 보조사의 의미·기능과 그 변화 양상」『국어학』44
- 박재연(2006)『한국어 양태 어미 연구』태학사
- 박진호(1995)「현대국어 ‘만’, ‘뿐’, ‘따름’과 중세국어 ‘만’, ‘써’, ‘씩름’의 문법적 지위에 대하여」『국어학논집』2 (고영근 2010 より再引用)
- 이기갑(2009)「동남방언의 담화표지 ‘고마」『우리말연구』25
- 이승희(2011)「조선시대 한글편지를 활용한 국어사 교육」『정신문화연구』34(2)
- 李賢熙(2014)「‘X 만 하다’ 구성의 문법사」『2014 한국언어학회 가을학술대회 발표논문집』한국언어학회
- 정연희(2012)「한국어 가치 표현 ‘-을 만하다’의 문법화 연구」『言語와 言語學』55
- 최정도·김선혜(2009)「‘부사+이다’구문에 대한 연구: ‘그만이다’류를 중심으로」『국제어문』46
- 洪思滿(1979)「助詞 「-만」 의 意味分析」『東洋文化研究』6
- Angeliki, Athanasiadou., Costas. Canakis and Bert. Cornillie. (eds.) (2006) *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*, Mouton de Gruyter.
- Dieten, Stein. and Wright. Susan. (eds.) *Subjectivity and Subjectivization*, Cambridge University Press.
- Kim, Joungmin. and Kaoru. Horie. (2009) “Intersubjectification and Textual Functions of Japanese *Noda* and Korean *Kes-ita*” *Japanese/Korean Linguistics* 16
- Langacker, Ronald. W. (2006) “Subjectification, Grammaticalization, and Conceptual Archetypes” In Angeliki et al. (eds.).
- Narrog, Heiko. (2012) *Modality, Subjectivity and Semantic Change: A Cross-Linguistic Perspective*, Oxford University Press.
- Traugott, C. Elizabeth. (1995) “Subjectification in Grammaticalization” In Dieten et al.

(eds.).

Traugott, C. Elizabeth. and Richard. B. Dasher. (2001) *Regularity in Semantic Change*,
Cambridge University Press.

〈辭書類〉

국립국어원(2015) 『표준국어대사전 인터넷판』 국립국어원 (2015年3月20日閲覧)

한국어에 있어서의 (간)주관화 연구의 새로운 시점
—한국어학과 언어학의 융합의 필요성—

新井保裕
東京大学

본고에서는 (간)주관화라는 범언어학적으로 보이는 개념을 살펴본 후, 한국어라는 개별 언어에 나타나는 (간)주관화의 언어 현상으로서 ‘-(으)르래’, ‘-어야지’, ‘-더-’의 의미 용법과 그 변화를 살펴보았다. 선행연구에서 체계적으로 지적되지는 않았지만 이것은 (간)주관화의 경로를 따라가고 있음이 확인된다. (간)주관화라는 개념은 한국어학에도 유용함과 동시에 (간)주관화 연구에 있어서도 한국어는 새로운 연구 대상이 될 수 있을 것이다. 또한 대부분의 선행연구와 달리 본고에서는 일본어보다 한국어가 더 (간)주관화가 진행되었다고 보여지는 예로서 ‘만’과 일본어의 ‘dake’의 용법 변화를 들어 (간)주관화에 나타나는 상이성[相異性] 배후에는 어휘, 통사구조, 표현구조의 차이가 잠재하고 있다는 것을 밝혔다. 한국어와 일본어는 유형론적으로 유사하지만 언어학적 구조가 완전히 동일한 것은 아니며, 범언어적으로 보이는 (간)주관화에 있어서도 개별 언어의 언어학적 구조적 차이가 반영된다. 따라서 한국어의 (간)주관화에 관한 연구에는 한국어의 언어학적 구조를 잘 아는 한국어학의 시점이 요망된다. 또한, 이러한 시점은 한국어학뿐만 아니라 한일 대조 연구, (간)주관화 연구의 학문적 발전에도 기여될 수 있을 것으로 사료된다.

한국어에 있어서의 (간)주관화 연구에 새로운 시점을 제공하는 것이 본고의 목적이었으나, 그 과정에서 한국어학과 언어학과의 융합의 필요성을 살펴볼 수 있었다.